

2020年1月12日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「通り過ぎる神」

聖書：マルコによる福音書6:45～52

「湖上を歩く」この物語は実に不思議な話である。イエスは何故湖の上を歩く必要があったのか？弟子たちが舟を出し湖の真ん中に来ると、風が逆風となって漕ぎ悩んでいると記すが、特に嵐が吹いて弟子たちの舟が沈みそうになっていた訳でもない。この奇跡物語をどのように見ていく必要があるだろうか？

旧約聖書を見ると「神と海」との関係がよく出てくる。それは、神が海をも制していることを表現している。現在でも「海」は、巨大な力、未知の世界、生きる恵みと同時に、死の恐怖も見せつけるもの。昔から海を制するものは世界をも制するとされ、強大な船を造り続け、戦争に活用されてきた。第一次世界大戦で日本がロシアに勝利したのも戦艦の力によるものと言われる。聖書の時代で言えば、なおさら海の恐怖は相当なもの。ノアの箱舟物語、モーセのイスラエルの民を率いて海を渡る記事も海を制する神の力の物語でもある。イエスが湖の上を歩くという表現は、海をも制する神の力の表現がその背景としてある。

もう一つ。イエスが湖の上を歩いて弟子たちの「そばを通り過ぎようとした」とあるが、何故弟子たちのそばを通り過ぎようとしたのか？これも旧約聖書に出てくる。預言者エリヤは時の権力者に屈服寸前まで追いやられる中、ホレブの山に逃げ隠れする。恐怖の只中にある時、「主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた」（列上 19:11）。おびえるエリヤに神は現われてくださったが、しかし具体的な助けの御手は差し伸べない。ただ通り過ぎて行く。でもエリヤはその神の姿に励まされ、意を決して厳しい状況の只中に立ち帰って行った。その他、モーセの物語の中にも同様のことが記されている。

この「通り過ぎる神」に私たちの現実が見えるのではないか。この世は、混沌と悪魔的な力が支配する海である。その海で人はもがき、おびえつつ漂い、また漕ぎ悩んでいる。しかし神は、その海をも制するお方である。ただ現実には、「通り過ぎる神」のごとく、具体的な助けの御手は差し伸べられることは中々ない。でも、私たちはその海をも制するお方が、通り過ぎて行かれるその姿に勇気を得て、希望を見出して行きたい。（神谷）